


ともに考え、活動し、成長する博物館にむけて

- ・新しい県立博物館にご期待を！
…P1
- ・使いやすい博物館を作ります
…P1
- ・新県立博物館建設地から化石が出たゾ！
…P2～3
- ・新博の
 tchyan
 …P3
- ・新県立博物館の工事は、平成23年1月28日の起工式の後、順調に進んでいます
…P4
- ・新県立博物館のみどころ・ご利用ポイント紹介
…P5
- ・展示を制作するための調査研究と資料収集をおこなっています
…P6
- ・お知らせ …P8

新しい県立博物館にご期待を！

三重県知事 鈴木 英敬

今年4月に知事に就任して以来、新しい県立博物館のあり方について、さまざまな面から検証を進めてきました。

その結果、三重が育んできた自然や歴史・文化を次代に引き継ぐために、また、自分の住む地域への愛着や誇りを育み、子どもたちが将来への夢や希望を抱くきっかけを得るために、博物館が大きな役割を果たすことができると再認識し、新しい県立博物館の整備を推進するという結論に至りました。

新しい県立博物館では、展示を一度見て終わりではなく、多くの県民の皆さんがさまざまな博物館の活動に気軽に参加して、自分に合った使い方ができることで、“私の博物館”として親しんでもらえるようにすることをめざしています。

今までにない新しい博物館をめざして、皆さんと一緒に“みんなの博物館”づくりを進めていきますので、ぜひ建設的な意見や提案をどんどんいただきますよう、よろしく願いいたします。



使いやすい博物館を作ります

三重県立博物館 館長 布谷 知夫

博物館は、資料と情報、そして人のネットワークの宝庫です。日常的に博物館を利用しておられる方は、こんなに楽しくて、役にたつ場所はないと思っておられるでしょう。でも残念ながら、博物館を楽しんでいる方の数は、まだ一部でしかありません。多くの方は博物館とは、かた苦しくて、自分とは何の関係もなく、おそらく行くことなどない場所、と考えておられるのかもしれませんが。

そんなことはないのです。博物館は誰にとっても、楽しく過ごすことができる場所です。展示を見たり、講演会、ワークショップ、観察会などに参加しているうちに、自分でも時間をかけてやってみたいと思うことが見つかることでしょ。

新県立博物館では、展示を見るだけではなく、誰でも、知りたいことがわかり、やってみたいと思う活動ができるような、楽しい博物館を計画しています。多くのみなさんの意見を聞きながら、使いやすい博物館を作ります。少しでも多くの方に使っていただきたいと思っています。



新県立博物館建設地から化石が出たゾ!

新県立博物館の建設地から、約350万年前の化石群が発見されました。この時代は、学習交流スペースで象徴的な展示となる予定のミエゾウが生きていた時代です。今回の調査から約350万年前の建設地に生息した生物群や環境について明らかにし、ミエゾウの展示に活かしていきます。

化石が出た!

平成 22 年 12 月に、新県立博物館建設地の地層の状況を記録し、展示に活用するため、調査を開始しました。開始してすぐに、建設地の地層には、植物や昆虫、脊椎動物の化石が含まれることが分かってきました。

その後、1月28日に行われた起工式直後から2月2日まで予備調査を行いました。この結果、シカの下顎骨、スポン

の骨格、ワニの歯、タニシなどの貝類、昆虫、植物の葉や種子といった化石が見つかりました。これらの化石群について、大学の専門の先生方にご意見を伺ったところ、「約350万年前の国内でも例を見ないほど多様な分類群の化石が産出し、学術上極めて価値が高いので、調査を詳細に行った方がよい」という意見をいただきました。さらにこの時代は、新県立博



平成 23 年 1 月の予備調査

物館の象徴的な展示の一つとして全身骨格を復元する予定のミエゾウが生息していた時代です。こ

のことは、今後の新県立博物館の研究や展示方針を考える上で重要です。

地層・化石調査

平成 23 年 2 月 21 日には、これまでの予備調査の内容を公表し、3月13日には、「新県立博物館建設地地層・化石調査委員会」を発足させ、本格的に地層と化石を調査することとなりました。

3月13～21日に第一次調査、5月1～5日に第二次調査を実施し、延

べ700人以上が参加しました。この調査では、建設地の地層がどのように積み、化石が保存されたかを調べるため、地層をスケッチして記録してから、化石を採集しました。これらの調査では、予備調査に加え、シカの角、ワニの鱗骨、魚の歯等の脊椎動物、貝、昆虫、植物等の化石が合計

1,000点以上発見されました。特にゾウの足跡の化石は、歩いた方向が分かるものでし

た。建設地の化石は川が氾濫したときにできた地層に集まっており、そこで見つかった植物や昆虫の化石は、現在よりは暖かい気候を好むものが多いことが分かりました。

また、今回の調査は、新県立博物館がめざす「協創」と「連携」の先駆的な取組として、博物館職員だけでなく、大学等に所属する各分野の研究者や学生、学校の先生、三重県立博物館の



調査に参加したサポートスタッフのメンバー（第二次調査）

サポートスタッフや多くの県民の方々とともに行いました。特に5月3日の、「子ども化石調査体験&現地見学会」には、358名の親子にも調査に加わっていただきました。この中で、ワニの歯など貴重な化石の発見がありました。



足跡発掘のようす（第二次調査）

移動展示

これまでの調査の結果について、7月12日～31日に、建設地の向かい側にある三重県総合文化センターで速報展「化石がでたゾ!—みんなでしらべた新県立博物館建設地—」という移動展示を開催しました。この速報展では、「みんなでしらべた新県立博物館建設地」、「新県立博物館の地層と化石」、「三重にゾウがいた頃」という3つのテーマに沿って紹介

しました。
この速報展の関連行事として、7月16日には中間報告会を行いました。中間報告会では75名が参加し、私中川が調査の概要について発表した後、地層・化石調査委員会の森勇一委員長から地層や化石について、樽野博幸委員から脊椎動物化石について講演していただきました。

7月18日には「しゃべり場～みんなでしらべ、展示ができる!?～」で、



中間報告会 森委員長の講演

今回の地層・化石調査を題材に、一般の方々に新県立博物館の調査や活動についてご意見をい

ただきました。また、同日には私中川が展示解説を行いました。



速報展のようす

今後の調査研究

現在も建設地から採取した化石のたくさん含まれる岩石を取り置きしてあります。この取り置きした岩石について、三重県立博物館サポートス

タッフの化石・鉱物グループを中心に調査を継続しています。今後も貴重な化石の発見が続くと思います。また、委員会の各専門の先生方が、調査したデータを分析してま

とめつつあり、まとめ次第展示や報告会で公表する予定です。楽しみにしててください。

(中川良平)

新博の **おっちゃん**

たきがめ かずや (監修)

中川です 今回の移動展示を担当しました

ちよっこ 中川さん みんなが見つけた化石の名前を全部調べたの?

準備中から副室長の鋭いつつこまめに目が泳いでしまい

今でも困った時はこんな目になっちゃいます

新県立博物館の工事は、平成23年1月28日の起工式の後、順調に進んでいます。

今回は新県立博物館で採用されている特徴的な工法について紹介します。

地震の揺れを和らげるしくみ（免震工法）

地震時における人身の安全や、貴重な収蔵資料や展示している資料の保護のために、免震工法を採用しています。免震工法を採用した建物は、普通の建物に比べ、地震時の揺れを減らして、建物内部の家具等の転倒を防止し、人や財産への被害

を少なくします。新県立博物館では、1階の床下に免震ピットを構築し、建物全体の各柱の直下に免震装置（鉛プラグ入り積層ゴム支承）を配置することにより、地震の時に人の安全や、貴重な資料の転倒・落下防止に努めています。



免震装置（鉛プラグ入り積層ゴム支承）

地中の熱を利用する空調システム

資料の保存のため24時間空調する収蔵庫及び展示室について、地中の熱を利用した空調システムを採用しています。

住宅で一般に使用されている空調システムのエアコンは、室内の空気と室外の空気の温度差より熱を交換して、室内の冷房や暖房を行っています。夏の暑い時や冬の寒い時には、大気と熱を交換する効率が下がるため、エネルギー消費が大きくなるデメリットがあります。また、夏の暑い時には、さらに暑い空気を室外機から大気へ出すため、都市部で気温が上昇する原因のひとつとされています。

気温が季節によって大きく変わるのに対し、地中の温度は、地上面より

概ね10mの深さになれば、一年を通して安定し、その地域の年間平均気温（津：15.5℃）とほぼ同じとなります。

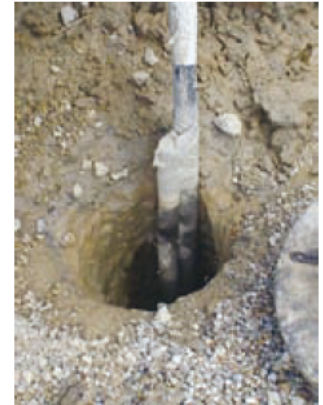
そこで新県立博物館では、直径20cmの鋼管で地下を約100m掘り下げ、地下100mまで液体が循環するパイプを54本設置しました。このパイプの液体が地中を循環して、地中の熱と熱を交換するので、一般的なエアコンに比べてエネルギー消費が少なくなる空調システムとなります。

なお、この空調システムは東京スカイツリーでも採用されています。

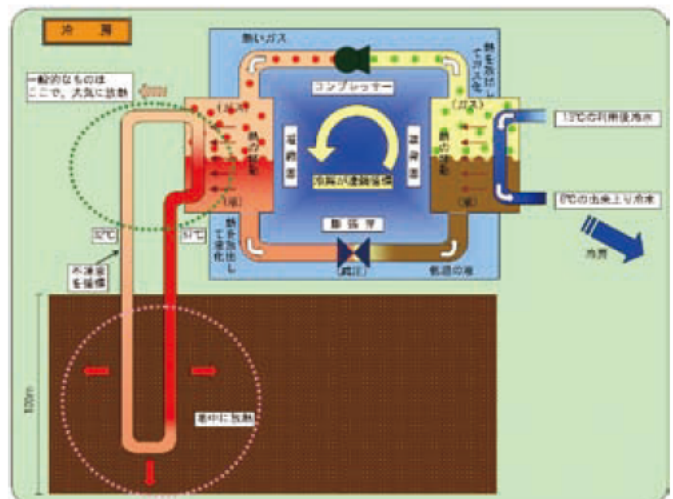
（安藤亨）



鋼管による掘削作業の様子



地下100mへのパイプの設置の様子



冷房時の地中熱との熱交換のしくみ

～新県立博物館のみどころ・ご利用ポイント紹介～

このページでは、新県立博物館のさまざまなコーナーの魅力について、シリーズで紹介していきます。



今回はココ

交流のかたち ～モノの交流～ 伊勢商人

東西日本の結節点、伊勢神宮の存在、地域産業の発達などを背景に、伊勢商人は生まれました。江戸時代初め、彼らは飛躍的に発展する江戸に進出して活発な経済活動を展開しました。このコーナーでは伊勢商人を中心にモノの交流を紹介します。

江戸を制した伊勢商人

江戸庶民の日常衣料として需要が急増した木綿。各地で生産された木綿の中でも、伊勢商人が扱った伊勢木綿は品質が良く、染織の技術・デザインともに優れていました。

当時編さんされた『和漢三才図会』にも、木綿は伊勢松坂のものが上質で、河内摂津のものが2番目と

記されています。

また、「松坂縞」と呼ばれた伊勢木綿の縞柄は、江戸っ子好みの“粋”なものとして江戸市中で高い人気を博し、美人画などにもしばしば描かれました。

伊勢商人が送り出した伊勢ブランドの木綿は江戸庶民の日常ファッションをリードしていたのです。



三井・越後屋店頭のにぎわい（「浮絵駿河町呉服屋図」）

江戸に多きもの 伊勢屋 稲荷に……

江戸の伊勢屋がすべて伊勢出身だった訳ではありませんが、松坂・射和・津・白子などから実に多くの伊勢商人が江戸に進出しました。

彼らは伊勢に本家（本店）、江戸に江戸店を構え、仕入れから販売まで一貫した流通システムを作りあげました。主人は本家に住み、販売・営業拠点の江戸店は番頭などが経営するしくみや、江戸

店の番頭・手代から丁稚までほとんどが伊勢出身という地縁的つながりの強い組織、莫大な利益を上げながらも質素・節約を重視した家訓・店掟など、特色ある経営形態をもっていました。

当時、江戸の大伝馬町には川喜田家・田端屋（津）、長谷川家・長井家（松坂）などの伊勢商人がずらりと暖簾をならべ、駿河町の三井家（松坂）は薄利多売の斬新な商法で注目され、江戸の経済をリードしていました。

あるじは、国にのみ居てあそびをり……

本居宣長が『玉勝間』に記しているように、豊かな経済力を背景として、本家にいた主人は、芸術や学問などの文化活動に力を注ぎ、当代一流の芸術家・文筆家への支援や幅広い著名人との交流を通して、伊勢の文化を高めました。（杉谷政樹）



縞柄の着物姿の美人画



大伝馬町に並ぶ伊勢商人の江戸店（「東都大伝馬街繁栄之図」石水博物館蔵）

展示を制作するための調査研究と資料収集をおこなっています

三重のくらしと自然の写真を収集するプロジェクトが始動します!

このプロジェクトは、新県立博物館の開館に向けて、県民のみなさんと一緒に、三重のくらしと自然に関する写真を集め、三重を伝える資料として保存し、みんなで活用できるようにすることをめざします。

この取組によって、データ化した写真資料は、新

県立博物館の基本展示の「くらしと自然」のコーナーで、スライド画像や写真パネルにして公開する計画です。今年度は、この取組の始動年であることから、文化庁の支援を受けて「みえミュージアム活性化事業」の一部として実施します。まもなく写真募集を開始するほか、本年10月から来年2月まで桑名・津・名張・伊勢・尾鷲の県内5カ所で、速報的に写真パ



くらしと自然の写真収集イメージ写真

ネル展示を行い、この取組への協力を呼びかける予定です。ぜひみんなで

つくる展示にご参加いただければと思います。
(天野秀昭)

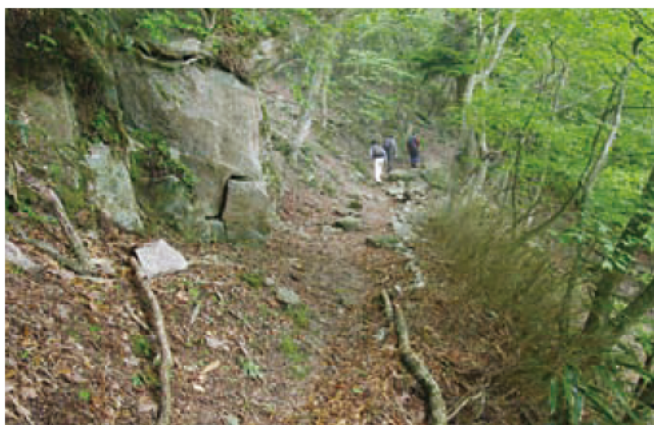
八風峠越の峠道を6月に踏査しました

新県立博物館の基本展示の「鈴鹿越えの商人たち」のコーナーでは、伊勢と近江を結ぶ通商路として栄えた鈴鹿山脈の八風峠や千草峠の山越えの道をめぐる中世（主に室町時代）の歴史を紹介します。

中世にこの峠道の利用権を独占した近江の商人たちは、桑名などで美濃紙や海産物、伊勢布などの産物を仕入れて、近江

や京都に運び販売しました。また、この峠道は、貴族の山科言継や連歌師の宗長、織田信長が往来し、政治的・文化的・軍事的にも重要でした。

今回の踏査では、八風峠を登りました。東麓の登山口を出発し、溪流に沿って進み、急峻な峠道を息も絶え絶えに登りきると標高945mの峠に到着しました。途中、石碑や石仏など峠の歴史を物語る痕跡を調べながら、2時間余りの行程でした。



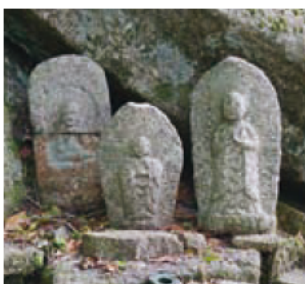
険しい峠道

宗長の日記にも険しい峠道の様相が記されていますが、品物を運搬するために、狭く急な峠道を往来した中世の商人たちの労苦はさぞや大変であったと思われます。峠を少し降りたあたりでか

つて峠の茶屋があったと思われる平坦地や茶碗の破片を見つけることができました。今回の踏査を通して得られた成果や現場の感覚を大切にして展示に活かしていきます。
(天野秀昭)



溪流沿いの道



坂中の地藏



八風峠の広場
(木の鳥居と八風峠の石碑)

「伊勢湾の自然」のコーナーをみなさんとともに調査して展示をつくっています

このコーナーでは、松阪市の松名瀬干潟をモデルに、河口の汽水域、ヨシ原、干潟、砂浜、アマモ場、遠浅の水域の豊かな生態系を展示することにしています。

三重県立博物館サポートスタッフの生きものグループは、本年度の活動で松名瀬干潟において大潮の最も潮が引く時に、

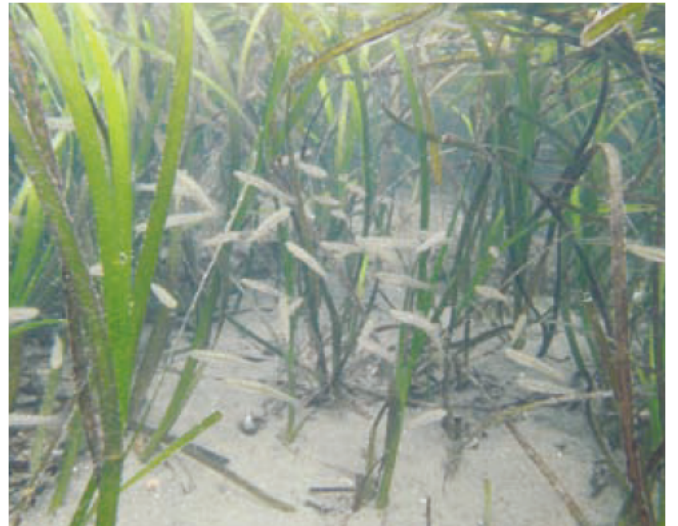


干潟で調査するサポートスタッフ

このコーナーの展示制作のための資料収集調査をすることにしました。これまで5月15日と7月17日に、生きものを採集し写真を撮影したり数を数えたり、また水に潜って観察することで、その生態系を構成する生きものを調べました。アマモ場では、ヒメイカやタツノオトシゴ、ウミウシなどが、また河口干潟では、アシハラガニ、ウロハゼ、オカミミガイなどが、子どもたちによって採集され観察

することができました。その時の感動や気づきが、このコーナーで味わえる、そんな演出をみなさんとともに考えていきます。

(北村淳一)



アマモ場で群れる魚



サポートスタッフ集合写真

「鈴鹿山脈の自然」を語る「冬の岩場に立つニホンカモシカ」

新県立博物館の基本展示で紹介する三重の多様で豊かな自然のひとつ、「鈴鹿山脈の自然」のコーナーでは、冬の岩場に立つニホンカモシカ



三重郡菟野町で滅失した冬毛のカモシカ

の剥製^{はくせい}を作製します。冬の鈴鹿山脈は、県内でも日本海側の気候の影響を受けやすく、雪が多いのが特徴です。また、日本の固有種として国の特別天然記念物であり、県の獣にも指定されているニホンカモシカは、岩

場などが多い山岳地帯に生息しているため、鈴鹿山脈の花崗岩の岩場でもよく観察されています。このためシンボル動物として展示をします。

特別天然記念物のニホンカモシカは、死亡個体が発見されると、市町・県の文化財担当部局によって身体の測定、死因確認、DNA サンプル採取などが行われ、滅失記録が作成されます。三重県立博物館では、以前から、これらの滅失の記録に協力し、個体の状態を確認して引き取り、資料として登録・保存し、活

用してきました。昨年^{しんねん}の冬には、三重郡菟野町で滅失したオスの冬毛の幼体を引き取りました。この個体を冬の鈴鹿の岩場に立つニホンカモシカとしての展示に活かしたいと思います。ご期待ください。

(今村隆一)



お知らせ

昔のくらしをテーマに移動展示を開催します

この冬には、本年度2回目の移動展示を伊勢市で開催します。博物館にある昔の道具をご覧いただくとともに、実際に道具を使ってみる体験コーナーや、昔のくらしを経験された方からお話を聞く機会を通して、

地域のくらしを身近に感じていただけたらと思います。また、小学校の先生方にアイデアをいただきながら、子どもたちが調べ学習で使用する小冊子を作成します。

(門口実代)



日時 平成24年
1月21日(土)～2月26日(日)
火曜休館

場所 伊勢市立小俣図書館
(伊勢市小俣町元町 663-1)

お雑煮プロジェクト ～新博ティーンズプロジェクトPARTⅢ～

子どもたちを対象にし、文化庁の支援を受けて行っている「新博ティーンズプロジェクト」も今年で3年目になります。今年のテーマはお雑煮。みんながお正月に食べるお雑煮ですが、じつは地域や家庭によって、お餅の形も具材もだし汁もさまざま

です。そんな三重県のお雑煮のことをみんなで調べてみませんか。お家のお雑煮についての情報を博物館に寄せていただいて、三重県内のお雑煮マップを一緒につくってみると、おもしろい発見があるのではないかと思います。今後、「お雑煮通信」や「お

雑煮調査カード」をつくってお配りし、来年にはまとめとしてお雑煮交流会も開催する予定です。ふるってご参加ください。

(門口実代)



フィールドワーク「旅するチョウ!アサギマダラの渡りのルート調べてみよう」

日時 平成23年10月16日(日) 9:30～15:00 **場所** 鳥羽市答志島

渡りをするチョウ「アサギマダラ」の翅に「しるし」をつけて、どんな旅をしているのかを調べます。

文化財探訪「城と街道のある町を訪ね歩くー桑名編ー」

日時 平成23年10月22日(土) 10:00～16:00(予定) **場所** 桑名駅周辺

本多忠勝の桑名城下を訪ね、東海道の道筋や寺院、萬古焼きの始祖なみろうぜん沼波弄山の墓などを巡ります。三重県埋蔵文化財センターとの共催事業です。

三重大学との連携シンポジウム

「三重の近代史から地域活性化の可能性を探る」(仮題)

日時 平成23年11月19日(土) 13:30～16:30

場所 四日市市総合会館 8階視聴覚センター視聴覚室

地域の遺産は、歴史的価値を再認識することで地域づくりに活かせる大きな可能性を持ちます。こうした地域づくりに博物館や大学、市民がそれぞれの立場からどのように貢献できるのか、今後の展望を探ります。

こども会議

日時 平成23年12月18日(日)

場所 三重県総合文化センター 生涯学習センター4階 大研修室

みんなで作る博物館会議2011

日時 平成24年2月19日(日)

場所 三重県総合文化センター 生涯学習センター4階 大研修室

お問い合わせ

三重県生活・文化部
新博物館整備推進室

〒514-0006
三重県津市広明町 147-2
三重県立博物館内

TEL: 059-228-2283(代表)
FAX: 059-229-8310

E-mail
shinhaku@pref.mie.jp

新県立博物館の情報は、
ホームページ
でご覧いただけます。



<http://www.pref.mie.lg.jp/SHINHAKU/HP/>